【特集】

これからの広報

広報紙…
物理的に表現すれば　紙にインクを染み込ませただけの物質。
行政的に表現すれば、市からのお知らせや市民の活躍を伝える広報紙。
でももう、そんな当たり前の広報紙じゃ満足できない！
紙とインクでできた広報紙が
誰が関わり　何を伝えるかで
〝まち〟の空気が伝わり
〝まち〟の空気を変える
「これまでの広報紙」から「これからの広報」へ――

担当から担当へ紡がれてきた広報紙。
広報担当者に広報紙への思いを聞き、広報紙の持つ役割を見つめます。

6町が合併して生まれた「広報あきたかた」

平成13年の旧美土里町で広報担当となった戸田邦昭さん。平成16年に高田郡6町が合併し安芸高田市となった後、「広報あきたかた」の初代担当となり、広報紙の編集を行いました。「合併後の創刊号を出すときは、各町の広報担当者に『情報をください』とメールを打って情報をかき集めました。その後も、町によって広報紙の作り方が違うので、それぞれの広報紙のいいところを取り入れながら、わかりやすい情報の整理の仕方を探りました。『こうしたらいいな』と前々から思っていたことを、『広報あきたかた』になったことを機に実行できたことは大きかったです」と当時を振り返ります。6つの町が1つのまちになる合併。それぞれのまちに紡がれた歴史や風土がある中で、『『一体感』が大きなテーマだった」と言う戸田さんは、取材する地域が偏らないよう心掛けていたと言います。「合併したこと、広報が変わったことをどれだけの人が受け入れてくれるのかなという不安がありましたが、安芸高田市という新しいまちのイメージを『広報あきたかた』から発信したいと思っていました」。

戸田邦昭（とだくにあき）さん（41歳）

広報紙はまちのイメージづくりの役割にあわせ、歴史的な資料にもなります。「まちの歴史は残していくべきもの。ずっと歴史を残していくためには紙で残していく必要があると思います」と戸田さんは言います。また、広報紙の持つ魅力については、「広報紙は、形がないものを形にしていくからこそ面白い。切り口や見せ方、伝え方に幅があります。それに、広報紙に出ていただいた方に喜んでもらえると僕も嬉しかったです」と語りました。安芸高田市民が数多く登場することは広報紙の大きな魅力の一つです。

広報紙作りは協働のまちづくり

「広報担当をしているときは、取材を通して多くの市民との出会いがありました。市役所の仕事をしていると、市民一人ひとりと向き合うことができないことがありますが、広報の仕事ではみんなが一人ひとりのドラマを生きていることに触れることができます」

と語るのは、平成23年から平成25年まで広報紙の主担当をしていた稲田幸久さん。市民の皆さんの人生経験に触れることができることは、広報担当者にとっては大きな魅力です。「人間としての膨らみを持つことができた」と、取材が人間的な成長につながったと言います。また、多くの市民の方々の思いを聞く中で、「自然とその思いを広く伝えたい」という思いを抱くようになったと語ります。

また、「広報紙作りは協働のまちづくりの基本」と稲田さんは言います。「市の職員が外に出て行って、市民の方と話をして、思いを聞いて、それを原稿にして、意見をもらいながら一つの記事を完成させる。〝意見を吸い上げて一つのものを作る〟という考え方は市の職員にとってはとても大切な考え方で、それが広報という仕事を通じて培われたのはよかったです」。市民と市の職員が一つになって、〝これからも住み続けたい〟と思えるまちづくりをしていくこと。広報紙は、小さな協働のまちづくりが実践できる場所です。

稲田幸久（いなだゆきひさ）さん（32歳）

広報紙で市民が行政をもっと身近に感じられればいいなと思います

＜毎月広報紙を手に取る市民に聞いてみました＞

浅枝久美子（あさえだくみこ）さん（八千代町・45歳）

私は関東方面に住んでいた時期があったのですが、そのときに地元がすごく恋しくて、安芸高田市に帰る度に「こんなにいいところなのにあまり人に知られていないのがもったいない」と常々思っていました。だから、地元に帰ることに全く迷いはなかったです。

広報紙を手に取ったときは「市役所頑張ってるじゃん！」とまちの元気を感じています。ただ、広報紙に市民が撮った写真や市民が描いたイラストを載せたりして、広報紙作りに市民が参加していくとよりいいと思います。知っている人が参加したり載っていたりすると、みんなが自然と見る気になると思います。広報紙がもっと身近で、元気があって、自分たちが参画していれば、なにか違うのかなと。私はやっぱり、広報紙からはまちの元気が伝わってきてほしいです。また、インターネットが発達した昨今ですが、紙面は絶対になくならないと思います。やっぱり紙で見るのが一番安心します。

これまでまちづくりについて考えてきて、昔は10年後にどうやったら自分がここで暮らしていけるかということを考えていましたが、最近は自分たちより上の世代の方たちが、いかにここで有意義に最期を送れるのかと考えたりしますね。

―心に残る特集―

【（左）広報あきたかた　2005（平成17）年12月号】
テーマ：「長寿」から「元気で長生き」―介護から介護予防へ―
（戸田さん）「できることは自分達でやって、やってもらったことは感謝して、生きていくだけです」と言ったおじいさんおばあさん（表紙）の生き方に感動しました。

【（右）広報あきたかた　2012（平成24）年12月号】
テーマ：もし、違いを受け入れることができたなら…～多文化共生がもたらすもの～
（稲田さん）外国の方とのインタビューでは言葉がなかなか聞き取れなかったり、原稿では外国語をどう表現するか悩みましたが、終わってみるとすごく楽しかったです。